

左記載せり。

右此の抄者、加賀州河北郡井家庄領家方福久村兼遠之氏寺千手院に住し、獨り北廂に向つて日を送り、徒らに雨日に眠つて時を移す。折節白山の靈瑞を仰ぎ、觀音の大悲を念じ、書物を少々眠りのひまに拜見するに、大薩埵の願力、和光同塵の誓約、慈悲深重の御はかりごと、ありがたく覚えて、願くは神威を末代に耀かし、信心を萬機にすゝめんために、筆にまかせ詞にまかせて、和語をもて此の一卷をつゞる。神慮はかりがたし。神代の秘事等、白山七社の深秘を多く是をのせ奉る。しかりと云へども、白山七社の靈祖をしらざる人は、知せず覺せず信せず仰がず。加様の人若し一見一聞の後一念の信心をおこし、一度の參詣もあらば、是則ち予が此の抄を作る本意の本望、一分の利益ともなりなば、何ぞ和光の本意にそむかんや。道俗男女若し此の抄望みの人には、禪頂參詣の契約をかためて披見せしむべし。神慮恐るべし、秘すべし。

永正五年庚七月廿三日

權大僧都勝慶六十歲

按するに、右權大僧都勝慶は、即ち千手院の住職にて、今

野町千手院の先代なるべけれど、開祖以來歴世の名傳承なき故に、幾世なるか詳かならず。又按するに、寶永元年舊跋書上帳に、石川郡鶴來村領に千手院と字仕る島有之、昔千手院と申寺跡之由申傳候。とあり。右寺跡は今鶴來金劍宮の並び北の方なり。島地をば千手院屋敷と呼びて、平面なる島地なり。従前白山比咩神社の長吏および神主建部氏の人々、多分野町千手院の檀家なり。おもふに千手院は、いにしへ鶴來の千手院屋敷と字せる地にありて、白山の衆徒の一寺なりし故に、長吏・神主ども後々迄菩提所とはなしたるならんか。但し千手院に今舊記等も傳來せず、傳説も絶えたりけん。鶴來村に居住の事知れずとぞ。千手院の院號は、清水寺の本尊千手觀音をば、そのかみこの寺の本尊となしたるゆゑに稱すといへり。福水寺の寺號は、如何なる由縁にて稱したるか今詳かならず。おもふに、千手院は金澤市中にての古刹なりといへども、傳來の縁起・舊記・寄附狀等悉く兵火等に罹り、或は紛失したりけん。今證とすべき書類なきゆゑ考ふべき術なし。徵證を得て追考すべし。

○千手觀音堂

千手院の本尊なり。此の尊像は天長年中に坂上田村麿の末孫兼愛法印清水觀音を勸請し、千手院を創立したるよし、由來書に記載し、則ち山城國清水寺の本尊千手觀音の摸像なるよしひ傳へたり。按するに、山城清水觀音は、大學頭明衡朝臣の清水寺緣起に云ふ。抑昔有一聖人。名曰延鎮。蓋報恩大師入室弟子也。六時三昧之行年久。弘法利生之願日積。着蓑衣以出聚落。杖木又以入山林。寶龜九年四月八日。抖擻之次尋到勝地。是則山城國愛宕郡八坂郷東山之麓也。翠嶺圍繞。自移爐峯之雲。瀑泉飛流。如倒銀漢之浪。溪邊有草庵之居。庵中有白衣之人。延鎮聖人問云。居士住此經幾年哉。名姓爲誰。年齡不審。居士云。名乃行敏。姓在隱遁心。念大悲觀音。口誦千手眞言。棲居此地久避喧囂。露往霜來。齡及三百。言談未畢。居士忽失。延鎮驚事之希有。悟地之靈勝。止宿庵中。練行瀧下。爰大納言坂上卿遊獵之次。欲飲冷水。尋得飛泉。相會延鎮。殊以歸依。便占件地可建伽藍之由。言約已畢。延曆十七年七月二日。延鎮聖人與坂上大將軍同心合力。始奉造金色十一面四十四手觀

世音菩薩像。假造寶殿所奉安置也。號清水寺。又名北觀音寺也云々。とありて、千手院の本尊佛なる千手觀音は、即ち右清水寺の本尊の摸像にて、古作の佛像なりしといへり。金澤三十三所觀音順禮歌に左の如く載せたり。十六番千手院觀音。みちびくもひとかたならぬ千手院浮世をすくふ誓ひ頼もし

加藤惟貞の蘭山私記に云ふ。寶曆四年二月廿七日夜野町千手院へ盜忍入り、御預け之本尊千手觀音を盜取りたり。其の盜越前にて召捕へらる。此の盜人は道心者にて、八年以前千手院方に召置きける處、不屈之儀ありて勘當し、追出したるよし。然處廿七日の夜、門前地の方より垣を破り、觀音堂の縁の下を切破り、上厨子の扉をこち離し、裏厨子并獨站・かな皿等盜取ると云々。右觀音を御預け之本尊と載せたるは過聞なるべし。弘化年中にも盜忍入り、住職を殺害し、金銀等を盜み行きたりけり。

○千手院馬頭觀音

此の觀音は、舊藩前田家より御預けの佛像なり。故に舊藩中は祈禱所にて、毎年護摩木と稱し、山林の松木を賜はる